

3 古天神古墳出土大刀の時期と系譜

大谷 晃二

(1) 銀装円頭大刀の系譜と時期

大谷は前稿〔大谷 1999〕で円頭大刀を倭風Ⅰ系列とⅡ系列に分けて論じた。今回、新たな知見を加え、円頭大刀の系列と変遷を再検討し、古天神古墳の銀装円頭大刀の位置づけを試みたい。

① 外来系金銀装大刀の様式と変遷（第61図）

倭風円頭大刀の特徴を明確にするために、朝鮮半島と倭で出土する金銀装大刀の展開を装具の構造や意匠から概観する。今回は、前様式と併存しながら推移する4つの様式を示す。

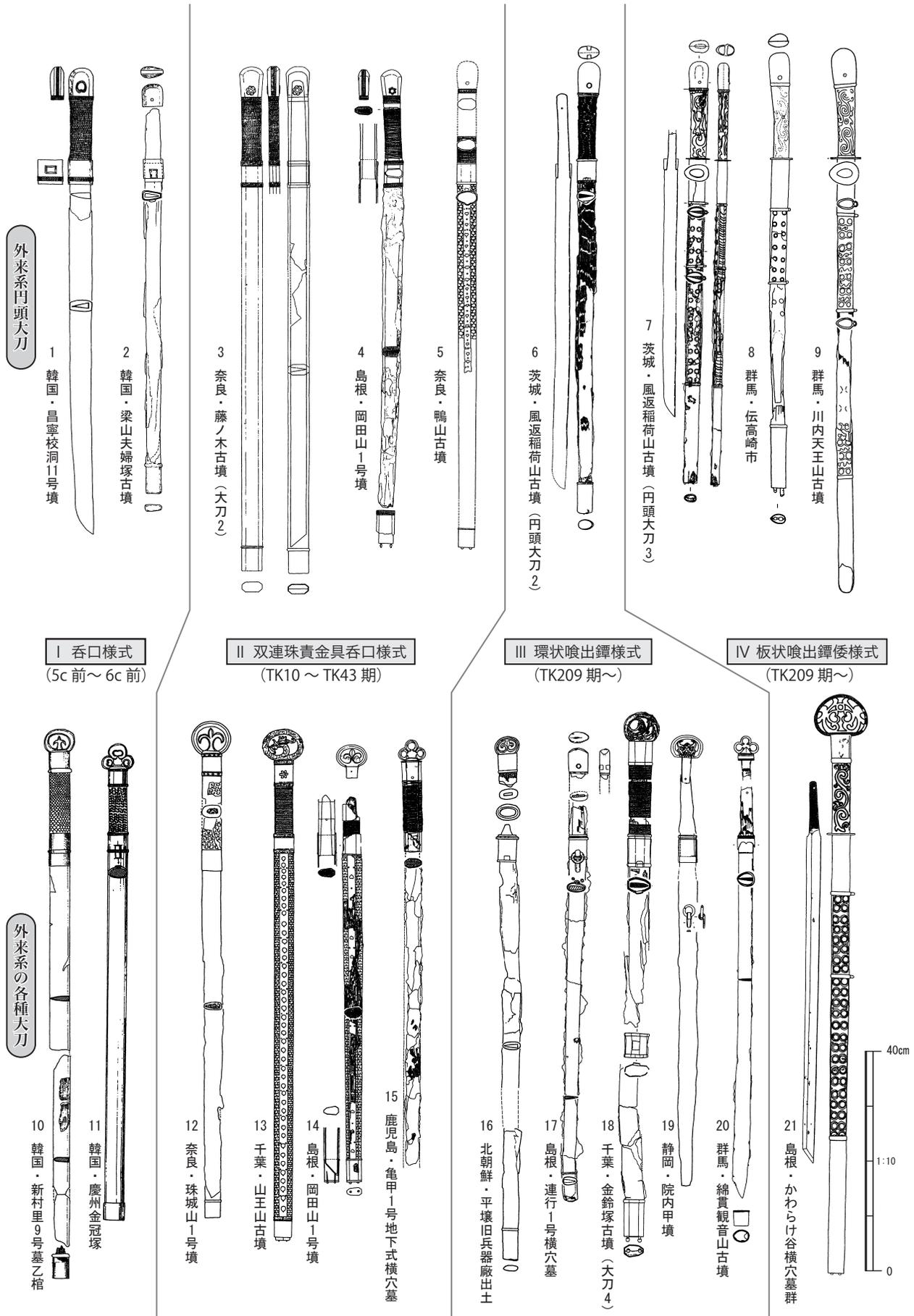
【Ⅰ：呑口様式】 柄頭の形式や地域ごとに外装の個性が強い。しかし、柄と鞘の関係は呑口式で共通し、佩用装置も凸状造出〔瀧瀬 1991〕が主流である。円頭大刀は、百濟・加耶出土の校洞 11 号墳例（1）（以下、数字は第 61・62・63 図の番号に同じ。引用文献も図表出典と同じ場合は略した）、宋山里 4 号墳例〔金 2017〕があり、柄頭は銀板を 2 枚合わせにし、合わせ目に文様帯をつける。円形またはハート形の懸通孔を縁金具で飾る。町田章の「伽耶南朝系儀仗大刀」〔町田 1987:86〕。梁山夫婦塚古墳（2）のように文様帯のないものもある。なお、新羅の類似の大刀は、頂部と側辺部の境に稜がつき、金宇大は「圭頭大刀」とする〔金 2017:238〕。懸通孔飾金具も文様帯のない簡素なつくりである。

【Ⅱ：双連珠責金具呑口様式】 柄・鞘が断面八角形になり、柄間は銀線巻、双連珠責金具または端部を玉縁で補強した筒金具（玉縁筒金具）を用い、鞘は鱗状文打出しの銀板で包み、ハート形透かしの伏金具で留める。単竜・単鳳・三葉・三累環頭、円頭大刀など、柄頭に関係なくみられる。町田章の「倭南朝系儀仗大刀」〔町田 1987:86〕。珠城山 1 号墳例（12）は、柄間を鱗状文打出し銀板で包む前様式の特徴をもつが、同時に双連珠菱形文責金具もあり、新様式の影響を受けている。また、山王山古墳例（13）〔小出ほか編 1980〕のように柄・鞘の断面が楕円形のものもある。円頭大刀は、藤ノ木古墳例（3）、岡田山 1 号墳例（4）があり、柄頭端が拡張し、文様帯をもつ。懸通孔は六花卉金具で飾る。これらは鞘を銀板で包まないが、鴨山古墳例（5）は鞘を打出し鱗状文の銀板で包む。

【Ⅲ：環状喰出鐔様式】 鞘口に対してわずかに突出する鐔をもつようになる。次様式の薄い板状鐔にくらべて、責金具と見紛うほど小さく、厚みがある。鞘に納めた時の外見から環状喰出鐔と呼ぶ。三葉・単竜・単鳳・獅嚙・三累環頭、金銅装圭頭大刀など各種大刀にみられる。また、佩用装置は凸状造出から環付足金具へと変化する〔松崎 1985:117、瀧瀬 1991:752〕。鞘尻は、前様式が筒金具の小口を別材の鹿角板などで塞ぐのに対し、この様式では袋状に一体で作るものがみられる（6・17）。

円頭大刀では風返稲荷山古墳円頭大刀 2 がある。柄・鞘は断面倒卵形で、外装はすべて金銅製である。柄頭は文様帯がなくなり、懸通孔金具も円形、責金具は細い環状責金具となる。環付足金具はないが、それをはめる加工が鞘口金具と責金具にある。鞘尻金具は筒部・小口一体作りの平尻である。

【Ⅳ：板状喰出鐔倭様式】 単脚足金具による二足佩用、薄い板状の喰出鐔をもつもの。柄間の金属線巻がなくなり、装具全体を金銅板で包み、列点による唐草文や円形浮文で飾る。双竜環頭・円頭大刀がある。一方、倭風円頭大刀の系譜の頭椎・圭頭大刀（34）も同様の外装となるが、これは透かし入

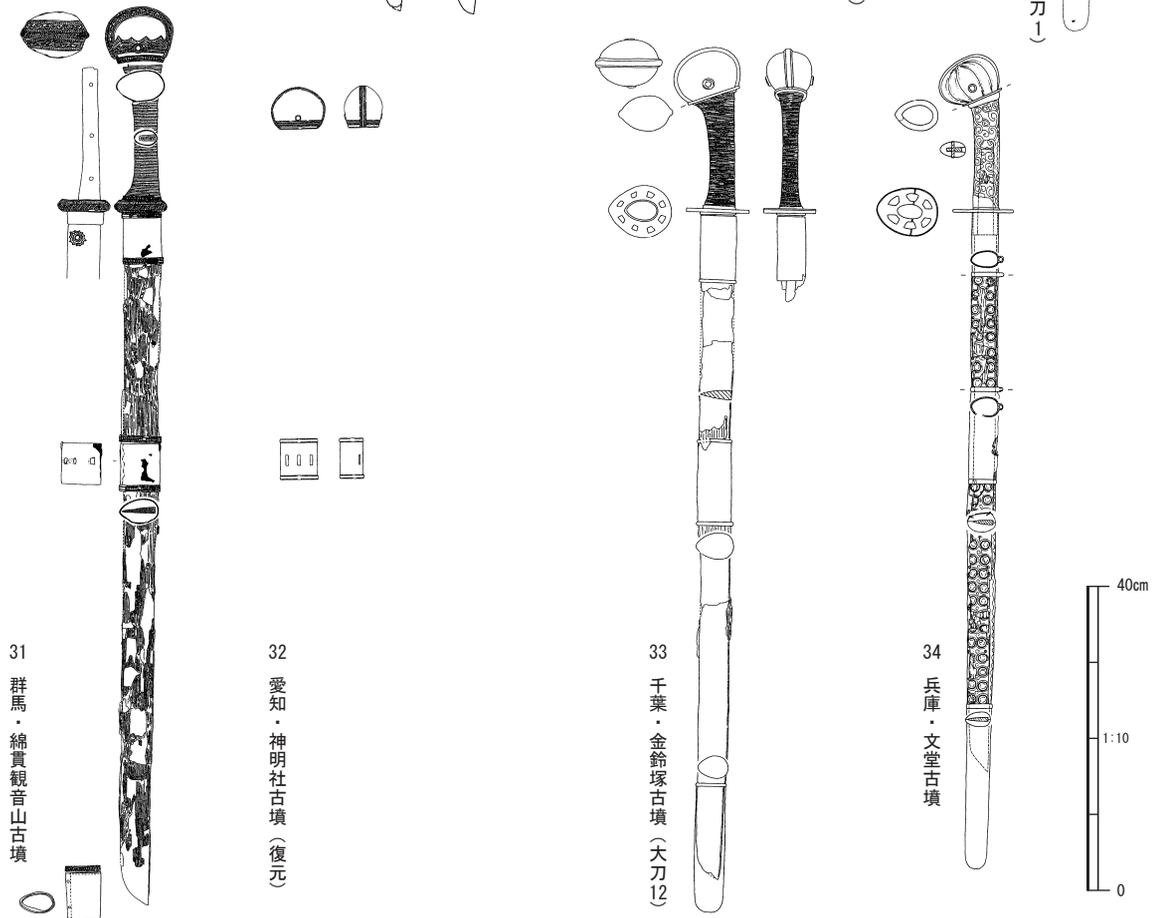


第61図 外来系金銀装大刀の様式の変遷

倭風円頭大刀の変遷



頭椎大刀の変遷



第62図 倭風円頭大刀と頭椎大刀の変遷

り大型板鐔をもつ。鞘尻は筒状平尻と袋状丸尻の二者を柄頭の種類により使い分ける。倭独自の様式で倭製であり、町田は「倭製儀仗大刀」と呼ぶ〔町田 1987: 86〕。円頭大刀 (7) の類例も多い。

以上の外来系 I ~ IV 様式は、外装、佩用方法、鐔の採用などの変化が、おそらくは中国 (事例は未発見) で生じ、それが朝鮮諸国や倭に影響して、こうした様式の変化が生じたものと推測する。

② 倭風円頭大刀の類例と属性の変化 (第 62・63 図)

倭風円頭大刀の特徴は、大振り、肥大化した柄頭、柄間の削り込み、大形の板鐔、刀身片関、茎落とし込み式である。類例は 1 点ずつ個性的だが、類似点を比較して倭風円頭大刀 I 系列の変遷をたどる。

栃木県別処山古墳例 (22) 柄頭、鐔、鞘口、鞘尻すべてが銀装。柄頭は表裏 2 枚の銀板の間に銀製鍍金の文様帯を被せる。鐔は木芯銀張りの断面かまぼこ形、鞘口・鞘尻は鉄地銀張り。柄頭や鐔は木彫銀張技法で、鹿角刀装具と同じ双直線刻文で飾る。銀板は銀鋳留で、鑢付けの筒金具や責金具は用いない。外来系大刀の外観を模倣して、倭系装飾付大刀の技術で作られている〔橋本 2006〕。

千葉県城山 1 号墳例 (23) 頭椎大刀とされるが〔丸子ほか 1978〕、銀板残片を実見した結果、稜のある銀装円頭と判断した。別処山古墳と同じ木芯銀張鐔と金銅製無透かし板鐔の両方をもつ。この点から本資料を別処山古墳と次の烏土塚・上塩冶築山古墳例の中間に位置づける。

奈良県烏土塚古墳 (24)・島根県上塩冶築山古墳例 (25) 烏土塚古墳例は、柄頭を欠損するが、装具と法量は上塩冶築山古墳例に酷似し、銀装円頭大刀と考えた。両者ともに、刻み入りの銅製責金具 (連珠環状責金具) で鞘口端部を責め、この責金具ごと鞘口を銀板で包む。鞘口のもう一端の双連珠責金具は、烏土塚古墳例の銅地金張りで凹魚々子文を施すのに対して、上塩冶築山古墳例は金銅装の無文であり、烏土塚古墳例が先行する。柄頭は、匙面状の銀板 2 枚を合わせ、間に文様帯を被せる。この構造は、別処山古墳例を引き継ぎ、さらには韓国昌寧校洞 11 号墳例 (1) にさかのぼる。

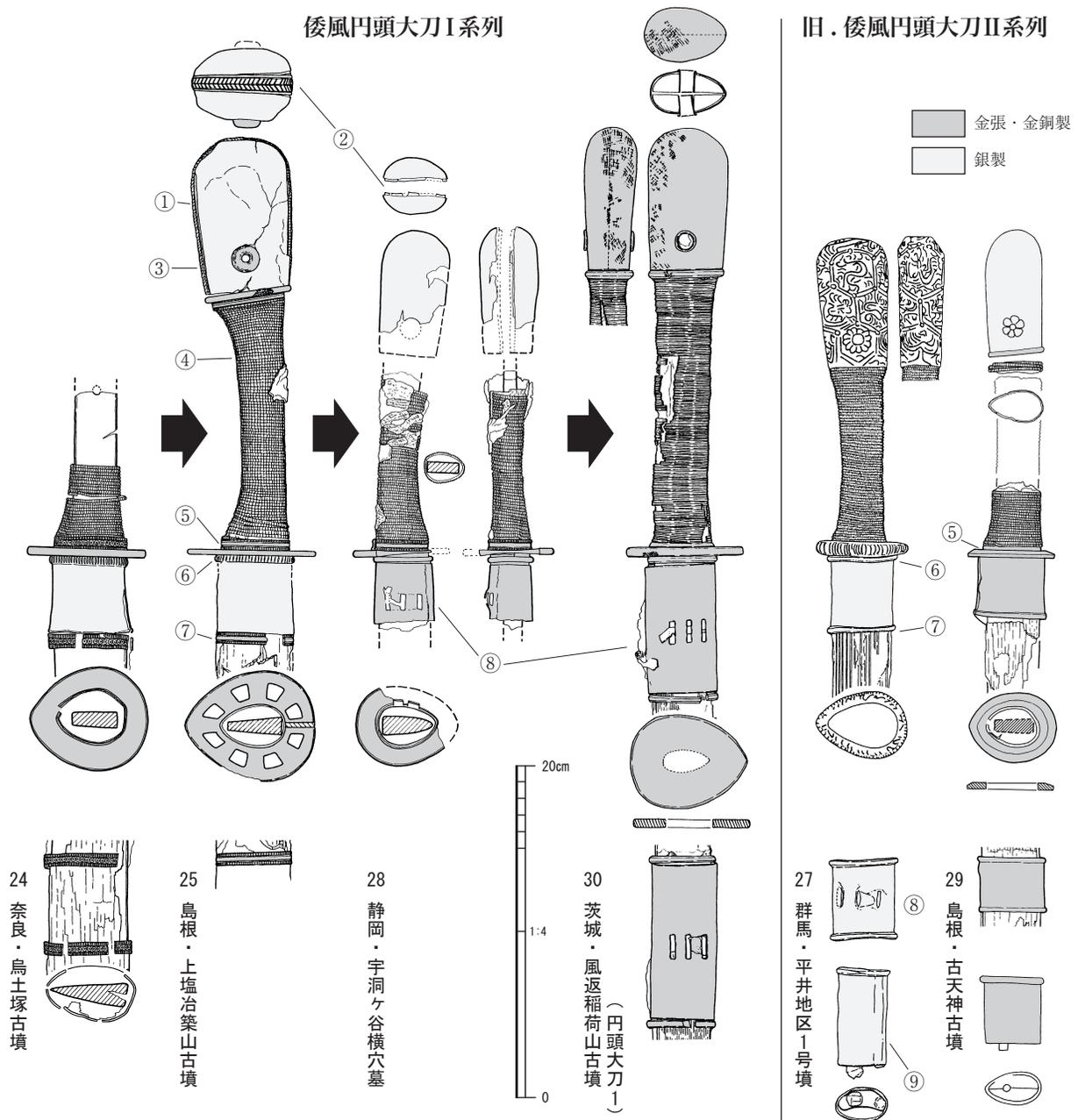
静岡県宇洞ヶ谷横穴墓例 (28) 不時発見のため柄頭に伴う刀身は不明だが、報告書では象嵌装鐔のある大刀 2 に伴うものとされた〔向坂 1971: 26〕。今回、実見して銀装柄頭は柄間銀線巻で金銅製鐔をもつ大刀 3 に伴うと判断した。理由は、柄頭の表裏 2 枚の銀板の縁は、文様帯を受ける溝状の折り込みがあり、上塩冶築山古墳例と同様の構造であり、さらに大刀 3 は材質こそ違うが、柄間、鞘口の基本構造も上塩冶築山古墳例と同じ点である。柄縁責金具が金銅製双連珠無文である点も上塩冶築山古墳例と共通するが、鞘口端の金銅製無文環状責金具と金銅製鞘口筒金具はこれと異なり後出する特徴である。さらに、鞘口には縫込み式〔瀧瀬 1991〕の佩用装置がある。

茨城県風返稻荷山古墳円頭大刀 1 (30) 装具すべてが金銅製、柄間金銅線巻き、柄頭は文様帯のない金銅板 2 枚合わせ、鞘尻も袋状丸尻となる。刀身は両関で柄間も刃側の削り込みはない。一方で、無文環状責金具、鞘口と鞘中に縫込み式の佩用装置をもつ点は、宇洞ヶ谷横穴墓例に共通する。

以上のように、倭風円頭大刀 I 系列は、別処山古墳例→烏土塚古墳例→上塩冶築山古墳例→宇洞ヶ谷横穴墓例→風返稻荷山古墳円頭大刀 1 と変遷する。この変化は、綿貫観音山古墳例 (31)→神明社古墳例 (32)→金鈴塚古墳大刀 12 (33)→文堂古墳例 (34) という頭椎大刀の変遷とも共通する。また、縫込み式佩用装置は、烏土塚古墳・上塩冶築山古墳例では欠損して不明だが、綿貫観音山古墳例にはこれがあることから倭風円頭大刀には、縫込み式佩用装置が初期から採用されている可能性がある。

③ 古天神古墳の円頭大刀～「倭風円頭大刀 II 系列」の再検討～

前稿で古天神古墳例 (29)、茨城県舟塚古墳例、川内天王山古墳例 (9)、岡田山 1 号墳例 (26)、平井地区 1 号墳例 (27) を倭風円頭大刀 II 系列とした。古天神古墳例を I 系列と分けた理由は、①環



①銀製柄頭		金銅製柄頭	鉄製柄頭	銀製柄頭
②文様帯あり		文様帯なし		
③無文懸通孔金具			花形懸通孔金具（花形飾）	
④連珠銀線卷		金銅線卷	連珠銀線卷	
⑤ 銅地金張 双連珠 ⑦ 魚々子文 責金具	⑤ 金銅製双連珠 ⑦ 無文責金具	⑦ ?	⑤ ⑦	⑤なし ⑤環状無文 ⑦銅芯銀張玉縁 ⑥筒金具 ⑦折返玉縁 ⑥なし
⑥連珠環状責金具		⑥無文環状責金具		⑥なし
⑧ ?		⑧縫込み式佩用装置		⑧なし
⑨ ? (筒状平尻か)		袋状丸尻	⑨筒状平尻	

第63図 倭風円頭大刀の類例と属性の変化

付足金具、②柄頭が細身、③柄間の割り込みが小さい、④I系列よりも小さい板状喰出鐔、⑤玉縁筒金具の存在であった。今回の調査で①は否定され、③も宇洞ヶ谷横穴墓例と比べて特別割り小さくはなく、⑥鎬鐔の存在がわかり、さらに古天神古墳例以外はI系列と親縁性があり、古天神古墳例のみが特異であることもわかった。これを玉縁筒金具、鎬鐔、懸通孔の花形飾の検討から述べる。

玉縁筒金具と責金具 外来系I・II様式の大刀では、筒金具に金板・銀板のみを用いる時、その脆弱さから別づくりの責金具を用いた。それがII様式の中で、金銅製による素材の強化と端部を折り返して補強した玉縁筒金具により、筒金具自体で柄や鞘を責めることができるようになった。一方で、III様式では、金銅製筒金具を用いながらも、別作りの金銅製責金具(無文環状責金具)を用いるものが一般的となる。さらに、倭製化したIV様式では、中空の断面がかまぼこ形をした責金具(半管状無文責金具)を用いる。このように玉縁筒金具と別作りの責金具のいずれを用いるかは、外見上の意匠の問題のみでなく、組み立ての発想から部品製作上も大きな違いであると考えられる。

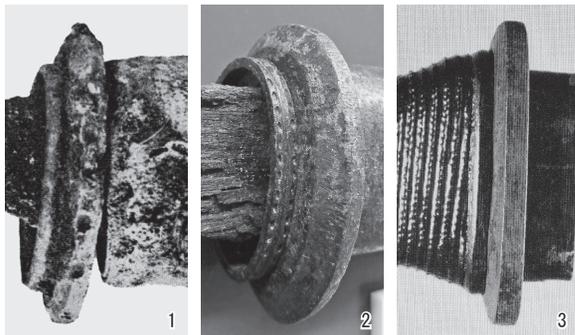
玉縁筒金具は、II様式の単竜・単鳳環頭、獅嚙環頭大刀(TK43～TK209期)などの外来系大刀に多用され、倭系大刀では類例を知らない。外見上似るのが、象嵌装円頭大刀の岡田山1号墳例(26)と平井地区1号墳例(27)である。ただし、これらは銅芯に銀板を被せる形で玉縁に仕上げたものであり、銀板の脆弱性を補う手法である。同様の発想は銀装圭頭大刀にもみられる。つまり、「折衷系」装飾大刀(≒倭風円頭大刀I系列)に特徴的な外見のみの模倣〔橋本2006〕である。さらに平井地区1号墳例に縫込み式佩用装置がある点からも倭風円頭大刀I系列との親縁性を知る事ができる。

以上から、外見上の共通点のみから象嵌装円頭大刀を古天神古墳例と同じ倭風円頭大刀II系列としたのは誤りであった。古天神古墳例の玉縁筒金具は倭系大刀では特異なものである。

鎬 鐔 類例に平壤旧兵器廠出土三葉環頭大刀(16)(第64図-1)と千葉県庚申塚A9号墳方頭大刀〔當眞(編)2001〕がある(第64図-2)。前者はIII様式の一つで6世紀後半以降⁽¹⁾、後者は双脚足金具を備えた7世紀代のものである。また、銀装圭頭、方頭、正倉院大刀(第64図-3)〔正倉院事務所(編)1974〕も、鐔の喰出部分のみを斜めに落とす。平壤旧兵器廠出土例の存在から、中国・朝鮮でこの種の鐔が古くからあり、7世紀の方頭大刀へつながると考える。鎬鐔が外来の要素である一方で、古天神古墳例の下端が尖る太い滴形の鐔は、倭風円頭大刀I系列と共通する特徴である。

懸通孔の花形飾 倭風円頭大刀I系列に花形飾金具はない。六花卉飾りは、II様式の外来系円頭大刀柄頭や単竜環頭大刀柄頭筒金具にある。古天神古墳例に後出するIV様式の圭頭大刀(千葉県姫塚古墳など〔豊島2015])は8～10花卉、象嵌装柄頭では岡田山古墳例14弁、平井地区1号墳例は佩表12花卉、佩裏9花卉と、古天神古墳例の六花卉は同時期の外来系大刀の要素である点を確認しておく。

まとめ 前稿で倭風円頭大刀II系列とした資料のうち、舟塚古墳例と川内天王山古墳例は、風返



第64図 鎬鐔の類例

(1. 平壤出土 2. 庚申塚 A9号墳 3. 正倉院大刀第9号)

稲荷山古墳円頭大刀2(6)、同3(7)を介すると、倭風円頭大刀ではなく外来系円頭大刀を倭製化したものである〔鈴木2009: Fig.84〕。また、岡田山1号墳などの象嵌装大刀も倭風円頭大刀I系列と親縁性が強く、古天神古墳例のみが倭風円頭大刀の中で特異な製品となる。よって倭風円頭大刀II系列の設定は廃棄する。古天神古墳例を倭風円頭大刀I系列の変遷にあてるなら、柄頭の文様帯がなく、筒状平尻である点から、宇洞ヶ谷横穴墓例と風返稲荷山古墳円頭大刀1の間となる。

古天神古墳の銀装円頭大刀は、柄間と刀身の形状、莖落し込み式、鐔の平面形などは倭風円頭大刀Ⅰ系列と共通するが、懸通孔の花形飾金具、鎬鐔、玉縁筒金具の要素は、他の倭風円頭大刀にはない外来の要素である。その解釈として2つの案をあげる。A案：倭風円頭大刀の工房で渡来系工人が製作。倭風円頭大刀Ⅰ系列は、城山1号墳例以降、鑲付け技術や緻密な双連珠文責金具など、外来系Ⅱ様式の技術が導入される。これを渡来系工人の参加とみて、彼らが外来の要素を加えて製作した。B案：朝鮮半島製の舶載品。5世紀の陝川玉田M3号墳大刀3のような倭と同じ外形の大刀が加耶地方にも存在するとの立場〔町田1997:138、穴沢1993:380〕に立てば、舶載品の可能性も否定できない。

(2) 象嵌装大刀の編年的な位置

古天神古墳の象嵌装大刀(大刀D)の時間的な位置を、そのハート形文の分類と変遷から検討する。

ハート形文様の種類と変遷 象嵌ハート形文の変遷は、橋本博文〔橋本1993〕が鳥文→ハート形文→ハート形の周囲を線で埋めていないもの、という変遷を指摘し、橋本の象嵌文様の変遷の第三段階～第五段階に位置づけた。西澤正晴は橋本の第三段階の中のハート形文の退化が2系統に分かれることを指摘した(本稿の縦線型と斜線型)〔西澤2000:94〕。ここでは、ハート形文を第7表のように分類して、その変遷を検討する(第65図)。

ハート形文は、鳳凰文を祖型とし、鳳凰の頭部を表現するもの(鳥文型)の後は、ハート形の中を線で充填するもの(線充填系列)と輪郭線と相似形の線を充填するもの(重ハート系列)に分岐する。

線充填系列 鳳凰の翼から頸部のラインを反映して、外形線の端部を丸く巻き込むもの(端部丸型)をへて、単純なハート形のものへと変化する。単純なハート形のもの、中を埋める線の向きにより縦線型と斜線型に分けられ、さらに外形により、全体が扁平なもの(扁平縦線型・扁平斜線型)と通常のもの(縦線型・斜線型)に分けられる。最も扁平なものは中の線が一本となる(扁平一線型)。

線充填系列の変遷を反映する可能性をもつ属性は、①ハート形の形状(端部丸型・通常のハート形・扁平型)、②内部の充填方法(縦線型・斜線型・一線型)、③ハート形文の数(単位)、④周囲の樹枝状表現の簡略化などをあげることができる。以下これらについて検討する。

①の形状については、端部丸型の充填方法は縦線のみで、斜線型や扁平型の事例がみられないため、端部丸型は斜線型・扁平型出現以前の型式と理解できる。扁平型については、中尾6号地下式横穴墓例(13)(以下、()数字は第7表、第65図の番号と同じ)⁽²⁾で、7つ程度のハート形文を描こうとして、4つ描いたところで、途中から扁平型に変更して2つのハート形文で充填している。この事例から扁平型はハート形文の数を減らす省力化の過程で生まれたと考えられる。さらに、扁平一線型は扁平化が極度に進み、内部の線数を減らしたものと理解して、もっとも後出するものとする。

このようにハート形の形状を変遷の有意な属性とすれば、②の充填方法の縦線と斜線の違いは、前後関係ではなく、併存するものと理解できる。以上から、端部丸型→縦線型・斜線型→扁平縦線型・扁平斜線型→扁平一線型という変遷が考えられる。

③のハート形文の数については、8窓鐔では透かし外側の狭いところに描くため数が増える傾向にある(本郷大塚古墳例(30)8単位、井田松江18号墳鐔4(16)10単位)。無窓鐔では8、6、4単位がある。6単位は鳥文型の芝塚古墳例(2)ですでにあり、8、6単位の両方が縦線型・斜線型にあるため、8単位と6単位は時期差ではない。一方で、5単位と4単位は、扁平型に限られ、扁平化したことで少ない数で鐔の平面を充填できるようになったものと理解できる。従って、無窓鐔のハート形文の数については、8・6単位→5・4単位という2段階の変化は指摘できそうである。

④樹枝状表現は、扁平一線型でも表現の明確なもの(30)がある一方、端部丸型でも簡略化したもの

のがあり (5)、単純に簡略化の方向では変化しない。

重ハート系列 端部丸型、外形が通常のハート形のもの (多重型)、外形が扁平なもの (扁平多重型) がある。先の線充填型系列の変遷から考えて、端部丸型→多重型→扁平多重型という変化が想定できる。扁平多重型は二重線の事例が多く、4単位となる。三津5号墳例 (24) は三重線4単位だが、外形は扁平型に近い。また、広木大町20号墳例 (23) の鐔には、ハート形文8つのうち、7つが重ハート系列多重型で1つが線充填系列端部丸型であり、両型式の併行関係がわかる。

以上のハート形文の変遷をまとめたものが第65図である。各型式の順番は出現順であり、実際には複数型式が併存しながら推移する⁽³⁾。第65図に初葬の時期を反映する須恵器をあげたが、縦線型以降は、TK209期の須恵器が出土している。仮に象嵌装大刀が初葬被葬者に伴うものとするれば、これらの諸型式は須恵器一型式程度の時間幅で変化したことになる。

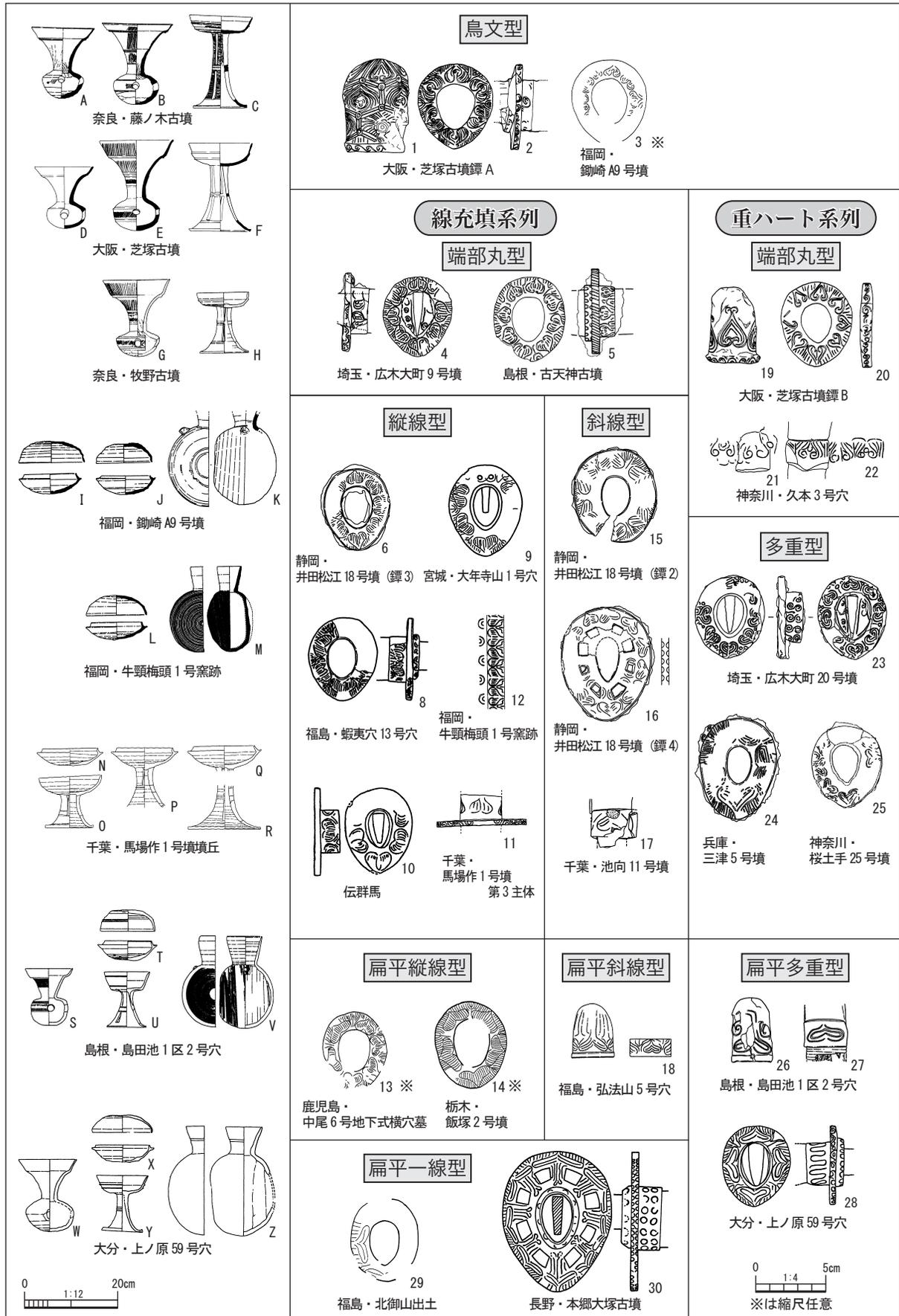
古天神古墳の象嵌装大刀の時期 古天神古墳の象嵌装鐔は、線充填系列の端部丸型であり、芝塚古墳例 (2) に後出し、縦線型に先行する。古天神古墳例の時期の上限を確認するために、芝塚古墳の須恵器編年上の時期を確認しておく。芝塚古墳の鳥文型の象嵌を入れた大刀 (1・2) は、3基の石棺のうち初葬の奥棺 (石棺I) の棺外脇に添えられ初葬被葬者に伴う [高萩1993]。須恵器は奥棺と奥壁の間に集積され、追葬品を含む可能性があるが、初葬に伴う古い様相のものには甕と高坏がある。

甕は、吉田知史の3段型C類 [吉田2007] が2個体あり (第65図E)、TK209期に位置づけられている。同種の甕は牧野古墳 (同G) から出土し、これに先行する3段B類甕は藤ノ木古墳 (同B) から出土する。高坏は、長脚2段3方透かしの無蓋高坏が4個体ある (同F)。牧野古墳の無蓋高坏 (同H)

第7表 象嵌ハート形文の分類

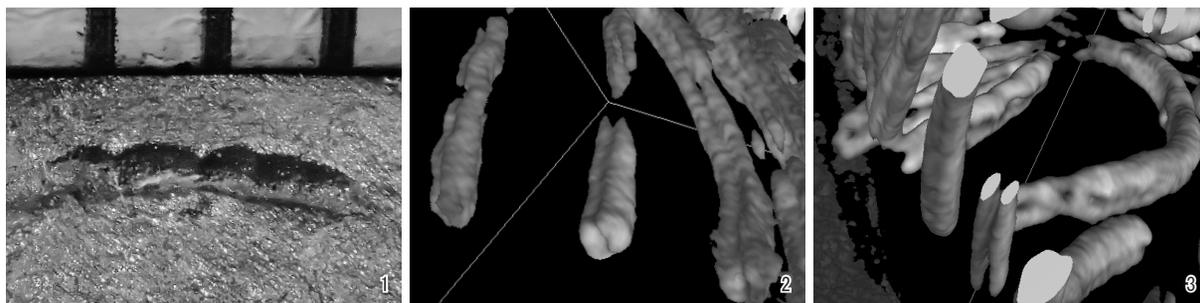
①鳥文型	線充填系列 (ハート形の輪郭の中を線で埋めるもの)			
	端部丸型	縦線型	扁平縦線型	扁平一線型
	 <p>2 鳳凰の頭部が表現され、鳳凰と判別できる (2芝塚古墳鐔A)。</p>	 <p>5 ハート形の輪郭の端部を丸く巻き込むもの (5古天神古墳)。</p>	 <p>6 数本の縦線または弧線で中を充填するもの (6井田松江18号墳鐔3)。</p>	 <p>14 ハート形の外形が扁平で横に広がり、中は縦線を充填する (14飯塚2号墳)。</p>
 <p>4 2つの音符形の文様となる例もある (4広木大町9号墳)。</p>		<th>斜線型</th> <td> <th>扁平斜線型</th> </td>	斜線型	<th>扁平斜線型</th>
		 <p>16 ハート形の中の線が中央に向かう (16井田松江18号墳鐔4)。</p>	 <p>18 ハート形の外形が扁平で横に広がり、中は斜線を充填する (18弘法山5号穴)。</p>	
	重ハート系列 (ハート形の中を輪郭線と相似形の線で埋めるもの)			
	端部丸型	多重型		扁平多重型
	 <p>20 ハート形の輪郭の端部を丸く巻き込むもの (20芝塚古墳鐔B)。</p>	 <p>23 数本の外形は単純なハート形で、輪郭線と相似形の線を充填するもの (23広木大町20号墳)。</p>	 <p>25 中心は相似形でなく直線のみになるものもある (25桜土手25号墳)。</p>	 <p>28 ハート形が扁平につぶれる。 (28上ノ原59号墳)。</p>

[凡例] 図の番号は第65図の番号と同じ



各型式の横の位置は併行関係を示すものではない。

第65図 象嵌ハート形文の種類と変化



第 66 図 古天神古墳出土大刀の象嵌画像

(1. 小さな円弧状なめくりタガネの痕〔目盛 1mm〕 2.3X 線 CT による銀線の状態)

は 2 段 2 方透かしを含むが、芝塚古墳は 3 方透かしのみで TK43 期の様相を示す。長脚 3 段 2 方透かしの高坏の出現を TK209 型式期の基準にすれば、芝塚古墳は TK43 期となるし、吉田分類 3 段型 C 類に基準をおけば、芝塚古墳は TK209 期となる。ここでは、藤ノ木古墳（TK43 期）→芝塚古墳→牧野古墳（TK209 期）の順を確認しておく。古天神古墳象嵌装大刀は、芝塚古墳初葬の大刀（TK43 か TK209 期の須恵器を伴出）に後出し、縦線型（TK209 期須恵器を伴出）に先行する。

（3）象嵌の技術について

大刀 D の象嵌溝の幅は約 0.5mm、溝を彫るタガネは、小さな一文字なめくりタガネと小さな円弧状なめくりタガネが使用される（鈴木勉氏による、第 66 図-1）。そのピッチは 3mm で 3～4 つ程度を刻む。X 線 CT 画像による象嵌線には次の特徴がある（第 66 図-2・3）。a）銀線の断面は丸ないし楕円形、b）銀線表面に縦方向の皺状の凹凸がある、c）銀線が 2 本重なったように見える。

a については、銀線が溝の形状を反映するならば、この溝の断面は V 字ではなく U 字となる。b・c については、銀線の製作方法に関連して 2 つの意見がある。今回は両説を併記する。

A 案は、銀板を「捩じり」や「巻き」〔林 2017〕で糸状にしたもので、b の特徴をその痕跡とみる。この場合、銀線の中心は空洞になるが、c の特徴はそうではない。これを 2 本の銀線を重ねて溝に打ち込んだと考えても、それぞれの一本ずつの内部が空洞になっていない。

B 案は、切断した帯状の銀線を「自由鍛造」でほぼ円形に近い断面の丸銀線にするものである（鈴木勉氏の教示による）。この場合、b の特徴は溝のタガネ痕の反映とみる。確かに銀板を巻いたものなら、皺状の線はもっとシャープに出てもよいかもしれない。これについては、確実に「巻き」や「捩じり」製の銀線の X 線 CT 画像と比較する必要がある。また、B 案の場合、c の特徴は、銀板を切断、鍛造する過程で生じた割れを反映し、d も鍛造の結果端部が極端に薄くなったものとする。

謝 辞

穴沢味光、鈴木勉、瀧瀬芳之、齊藤大輔の各氏からは象嵌装大刀の資料提供や象嵌技術について多くのご教示をいただいた。また、資料の実見については、掛川市教育委員会、香取市教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、坂靖、吉村和昭、長井郁織、平野功の各氏にお世話になった。記して感謝申し上げたい。

註

- (1) 町田は 5 世紀とするが〔町田 1987 : 88〕、三葉文が岡田山 1 号墳例と同様に立体的で、6 世紀と考える。
- (2) 吾平町教育委員会 HP の X 線画像による。
- (3) 瓢塚 40 号墳例〔安藤 1989〕では同じ大刀の円頭柄頭に多重型、鐔に端部丸型が描かれている。

引用文献

- 秋元陽光・大橋泰夫・斎藤光利 1992『別処山古墳』南河内町教育委員会
- 穴沢味光・馬目順一 1973「羅州潘南面古墳群—「梅原考古資料」による谷井濟一氏発掘遺物の研究」『古代学研究』70 古代学研究会 pp.15-30
- 穴沢味光・馬目順一 1975「昌寧校洞古墳群」『考古学雑誌』第60巻第7号 pp.23-75
- 穴沢味光・馬目順一 1983「三累環刀試論」『古文化論叢 藤澤一夫先生古稀記念論集』pp.293-329
- 穴沢味光・馬目順一 1993「陝川玉田出土の環頭大刀群の諸問題」『古文化談叢』第30集（上）九州古文化研究会 pp.367-385
- 安藤鴻基 1989「千葉県成田市瓢塚40号墳の資料吟味」『房総風土記の丘年報』13 千葉県立房総風土記の丘
- 石木秀啓 2007『牛頸梅頭遺跡群Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第60集 大野城市教育委員会
- 泉森 皎ほか 1992『本郷大塚古墳』須坂市教育委員会
- 岩原 剛・須川勝以 2003『三河考古』第16号
- 櫃本誠一・森下章司（編）2014『文堂古墳』大手前大学史学研究所
- 大谷晃二 1999「上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
- 大谷晃二 2015「金鈴塚古墳出土大刀の研究（1）単竜環頭大刀」『金鈴塚古墳研究』第3号 木更津市郷土博物館
- 小山市立博物館 2000『第40回企画展 古代の大刀のかがやき』
- 川江秀孝 1992「飾大刀」『静岡県史』資料編3 考古3 静岡県
- 河上邦彦（編）1987『史跡牧野古墳』広陵町教育委員会
- 金 宇大 2017『金工品から読む古代朝鮮と倭』京都大学学術出版会
- 小出義治ほか（編）1980『上総山王山古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会
- 後藤喜八郎 1996『久本横穴墓群発掘調査報告書』久本横穴墓群発掘調査団
- 小林義彦ほか 1997『鋤崎古墳群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第506集 福岡市教育委員会
- 酒巻忠史 2007『金鈴塚古墳出土遺物の再整理2—大刀の実測—』木更津市教育委員会
- 佐久間正明 他 2004『蝦夷穴横穴墓群—12・13号横穴出土遺物報告—』郡山市教育委員会
- 佐藤則之・菊池芳朗（編）1990『大年寺山横穴群』宮城県教育委員会
- 志村 哲（編）1993『平井地区1号古墳』藤岡市教育委員会
- 正倉院事務所（編）1974『正倉院の大刀外装』小学館
- 末永雅雄 1941『日本上代の武器』弘文堂
- 鈴木一有 2009『鳥居松遺跡5次 円頭大刀編』浜松市文化振興財団
- 當眞嗣史（編）2001『千葉県木更津市請西遺跡群発掘調査報告書Ⅶ—庚申塚A遺跡・庚申塚B遺跡—』木更津市教育委員会
- 高萩千秋 1993『高安古墳群 芝塚古墳』（財）八尾市文化財調査研究会報告38 （財）八尾市文化財調査研究会
- 滝沢 誠ほか 2000『静岡県指定史跡 井田松江古墳群—調査整備事業報告書—』戸田村教育委員会
- 瀧瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会 pp.5-40
- 瀧瀬芳之 1991「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集—設立10周年記念論文集—』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.739-778
- 瀧瀬芳之・野中 仁 1996「埼玉県内出土象嵌遺物の研究」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第12号
- 武井 勝・霜出俊浩 2000『神奈川県秦野市桜土手古墳群の調査（第二次）』桜土手古墳群第二次発掘調査団
- 千葉隆司（編）2000『風返稻荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会
- 徳江秀夫（編）1999『群馬県綿貫観音山古墳Ⅱ』群馬県教育委員会
- 豊島直博 2001「古墳時代後期における直刀の生産と流通」『考古学研究』第48巻第2号 考古学研究会 pp.82-100
- 豊島直博 2015「熊本市宮穴22号墓出土柄頭と関連資料」『熊本古墳研究』第6号 熊本古墳研究会 pp.62-68
- 奈良県立橿原考古学研究所（編）1990『斑鳩藤ノ木古墳第1次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所（編）1995『斑鳩藤ノ木古墳第2・3次調査報告書』斑鳩町教育委員会
- 新納 泉 1982「単龍・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号 史学研究会 pp.110-141

- 西澤正晴 2000 「井田松江 18 号墳出土の象嵌刀装具類について」『井田松江古墳群』戸田村教育委員会 pp.89-98
- 西山要一 1986 「古墳時代の象嵌一刀装具について」『考古学雑誌』第 72 卷第 1 号 日本考古学会 pp.1-29
- 丹羽野裕ほか 2002 『馬場遺跡・杉ヶ検遺跡・客山墳墓群・連行遺跡』島根県教育委員会
- 橋本達也・藤井大祐 2007 『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究』鹿児島大学総合研究博物館
- 橋本英将 2006 「折衷系」装飾大刀考『古代武器研究』Vol. 7 古代武器研究会 pp.50-57
- 橋本博文 1993 「亀甲繫鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼記念論文集刊行会
- 馬場一一郎・小川敬吉 1927 『梁山夫婦塚と其の遺物』古蹟調査特別報告 5
- 原田敏照ほか 1997 『島田池遺跡・鶴貫遺跡』島根県教育委員会
- 福島雅儀ほか 2000 『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告 8 弘法山古墳群』福島県教育委員会
- 町田 章 1987 「岡田山 1 号墳の儀仗大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会 pp.84-98
- 町田 章 1997 「伽耶の環頭大刀と王権」『伽耶諸国と王権』pp.123-147
- 松尾充晶 (編) 2001 『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター
- 松崎元樹 1985 「古墳出土鍔付足金物を施す大刀について」『東京考古』第 3 号
- 松本岩雄 (編) 1987 『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
- 松本岩雄 (編) 1999 『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
- 松本 勝 2011 『笹子遺跡群発掘調査報告書Ⅳ—馬場作古墳群第 1～5 号墳—』木更津市教育委員会
- 丸子 亘ほか 1978 『城山 1 号前方後円墳』小見川町教育委員会
- 向坂鋼二 1971 「4. 武器類」『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』静岡県教育委員会
- 村上久和ほか 1992 『上ノ原横穴墓群Ⅱ』大分県教育委員会
- 森 幸彦 2004 「福島県内出土の象嵌資料」『福島県文化財センター白河館研究紀要』2003 福島県教育委員会
- 山口典子ほか 1995 『佐倉市池向遺跡』千葉県文化財センター調査報告第 268 集 (財)千葉県文化財センター
- 吉田知史 2007 「文様と形態からみた後期古墳出土鏝の変遷」『勝福寺古墳の研究』大阪大学勝福寺古墳発掘調査団
- 林 志暎 2017 「古代金属象嵌線の製作技法による分類の試み」『文化財と技術』第 8 号 工芸文化研究所

図表出典

- 第 61・62・63 図：1. 町田 1987 第 36 図 (原典は穴沢・馬目 1975 第 29 図)、2. 町田 1987 第 37 図 (原典は馬場・小川 1927 図版第 22)、3. 檀原考古学研究所 (編) 1995 付図 1・2、4,14. 松本 (編) 1987 図版 8、5. 町田 1987 第 36 図、6. 千葉 (編) 2000 第 31 図、7. 千葉 (編) 2000 第 33 図、8. 滝瀬 1984 図版 3 (原典は末永 1941 第 98 図)、9. 滝瀬 1984 図版 3、10. 穴沢・馬目 1973 第 7 図、11. 穴沢・馬目 1983 第 8 図、12. 町田 1987 第 35 図を改変作成、13. 新納 1982 第 13 図、15. 橋本・藤井 2007 図 21、16. 町田 1987 第 35 図を改変 (原典は末永 1941 第 74 図)、17. 丹羽野ほか 2002 第 56 図、18. 大谷 2015 図 5、19. 川江 1992 図 406 を改変・作図、20. 徳江 (編) 1999 付図 4、21. 松尾 (編) 2001 第 42 図、22. 秋元・大橋・斎藤 1992 第 14 図、23. 大谷 1999 第 85 図、24,28. 大谷実測、25. 松本 (編) 1999 第 31-2 図、26. 松本 (編) 1987 図版 7、27. 志村 (編) 1993 第 19 図、29. 本誌、30. 千葉 2000 第 30 図、31. 徳江 (編) 1999 付図 4、32. 岩原・須川 2003 図 8、33. 酒巻 2007 付図 3、34. 櫃本・森下 (編) 2014 図 39。
- 第 64 図：1. 末永 1941 図版第 28、2. 木更津市郷土博物館金のすず提供、3. 正倉院事務所 (編) 1974 単色図版 12。
- 第 65 図：A～C. 奈良県立檀原考古学研究所 (編) 1990 図 137・138、D～F. 高萩 1993 第 34・35 図、G,H. 河上 (編) 1987 第 70・74 図、I～K. 小林ほか 1997 Fig.105・106、L,M. 石木 2007 第 12 図、N～R. 松本 2011 第 17 図、S～V. 原田ほか 1997 第 36・37 図、W～Z. 村上ほか 1992 第 344・345 図、1,2,19,20. 高萩 1993 第 36・37 図、3. 福岡市埋蔵文化財センター HP 「保存処理鉸具の実績」の X 線画像をトレース、4,23. 瀧瀬・野中 1995 第 4・5 図、5. 本書、6,15,16. 滝沢ほか 2000 第 35・36 図、8. 佐久間ほか 2004 第 2 図、9. 佐藤・菊池ほか 1990 第 8 図、10. 西山 1986 第 4 図、11. 松本 2003 第 11 図、12. 石木 2007 第 12 図、13. 吾平町教育委員会 HP の X 線画像をトレース、14. 小山市立博物館 2000 の X 線画像をトレース、17. 山口ほか 1995 第 4-209 図、18. 福島ほか 2000 図 52、21,22. 後藤 1996 第 14 図、24. 豊島 2001 図 2、25. 武井・霜出 2000 第 27 図、26,27. 原田ほか 1997 第 41 図、28. 村上ほか 1992 第 347 図、29. 森 2004 の X 線画像をトレース、30. 泉森ほか 1992 図 19
- 第 7 表：第 65 図と同じ。一部をトレース。